

（解題） 翻訳と編集という行為をめぐる

いた がき りゆう た
板 垣 竜 太

ここに活字化された『抗日パルチザン参加者たちの回想記 特選集』は、平壤の朝鮮労働党中央委員会直属の党歴史研究所によって1959年より刊行が開始されたシリーズの翻訳である（以下、朝鮮語の原典を『回想記』と略し、日本語の特選集を「本書」と呼ぶ）。のちに記すように、『回想記』は改訂を重ねながら1969年までに全12巻が刊行された（図1）。この朝鮮語で書かれた書物を、釜ヶ崎や山谷などの寄せ場で活動していた鈴木武が入手し、長い年月をかけて日本語に全訳し、自らの手でワープロに入力し、全体を分類しなおし、オリジナルな日本語全集として編纂したうえで、そこから28話のみを撰んだものが、いま読者の目にしている本書である。この「解題」



図1 鈴木武が所蔵する『抗日パルチザン参加者たちの回想記』全12巻

の目的は、原典たる『回想記』の出版から本書の出版にいたるまでの数十年にわたる一連のプロセスを、テキスト間の対照と鈴木語りから復元することによって、翻訳と編集という行為のもつ意義を浮かび上がらせるとともに、本書の文字を生きたものとして見えるようにすることにある。

もう少し率直な物言いをするならば、これは私にとっての3度の驚き（あるいは3度の事件とでも言うべきもの）を、「解題」の名を借りて文字化しておくものである。1度目の驚きは、まず寄せ場の活動家が12巻の『回想記』をひとりで全訳したという事実を知ったときだった。いかにしてそのようなことを実現したのか、私はその現場に迫りたいと考えた。2度目の驚きは、その日本語訳の正確さと読みやすさである。鈴木は朝鮮語を喋る人ではない。彼は読む人である。もっといえば、読むために訳した人である。彼は、原文と辞書と格闘しながら、この『回想記』を訳した。その翻訳がこのようなものになるプロセスも想像したいと思った。そして3度目は、鈴木がこの『回想記』を独自のしかたで分類し、自ら撰びなおしたことである。鈴木はどのように『回想記』の各話を意味づけ、独自の価値を付与したのか、それを知りたいと考えた。以下、これらの点について、本書の「解説」（原口剛・森田和樹）と多少重なる部分はあるが、そのプロセスに近づきたい。

『回想記』の諸版

まず翻訳の出発点となった『回想記』の成立と改訂について述べておきたい。というのも『回想記』自体が「ひとつの原典」とは言えず、版を重ねるにつれて内容が少なからず変動してきており、それが鈴木への翻訳にも影響を及ぼすことになったからである。改訂のたびに誤字脱字が訂正されるのはよくあることだが、『回想記』が朝鮮労働党の「正史」を構成するテキストである以上、政治変動の影響を少なからずこうむることになった。

1945年の大日本帝国の敗亡と米ソ両軍による南北朝鮮の分割占領を経て、1948年に新興独立国家として北緯38度線以北で創建された朝鮮民主主義人民共和国は、抗日独立運動家をその中核的な政治指導者に据えていた。もともと抗日独立運動は単一の勢力ではなく、共産主義系のものであっても、『回想記』の舞台となる中国東北部（旧満洲）で東北抗日聯軍の朝鮮人隊員として闘った^{キムイルソン}金日成をはじめとするパルチザン（満洲系）、中国共産党の拠点だった延安で活動していた朝鮮独立同盟独立運動家（延安系）、植民地朝鮮内で非合法活動を地下で展開していた活動家（のちの南労党系）などがあつた。これらの抗日独立運動家たちが、日本の植民地支配からの解放後、ソ連から派遣された指導者層（ソ連系）とともに、朝鮮労働党へと結集していった。かれらが国の創建においても党の組織運営においても中核的な役割を担ったことによって、運動史の叙述は、単純に客観的な歴史学の研究対象というよりは、それ自体が政治的な正統性の源泉となった。

抗日運動の歴史叙述にとって大きな転換は1956年に訪れた。ソ連のフルシチョフによるスターリン個人崇拜批判を受け、8月に公然と金日成批判をおこなおうとしたグループの試みが失敗に終わった（8月宗派事件）。この批判の担い手と目された延安系やソ連系の人々が、1956年末から1958年にかけて次々に粛清された。そのなかには解放後に民族解放闘争史の歴史叙述を主導していた^{チェチャンイク}崔昌益（延安系の中心人物の一人）や（その婿である）^{リチョン}李清源^{ウォン}らも含まれており、それまでの運動史の書き方が見直されることになった¹。それとともに、1959年に中国東北地方の抗日武装闘争戦跡地に大規模な踏査団を送るなど²、満洲系を中心とした「革命伝統」の構築があらためて進められることになった。

¹ 조수룡 「경합하는 '혁명전통」 『사학연구』 137, 2020 ; 문미라 「1950~1960년대 북한의 '혁명전통' 확립과정과 역사인식의 변화」 『역사와 현실』 119, 2021.

² 水野直樹 「抗日闘争の「聖地」を踏査・発掘する」 『社会科学（同志社大学人文科学研究所）』 52(4)、2023.

『回想記』は、まさにこの金日成を中心に据えた「革命伝統」構築の主要事業のひとつとして進められた。朝鮮戦争前から民族解放闘争史の研究事業をおこなっていた朝鮮労働党中央委員会は、1952年の革命闘争資料調査課の設置を経て、1956年に党歴史研究所を創設した。同研究所は、「朝鮮労働党闘争史を科学的に編纂」し、「朝鮮労働運動史、朝鮮労働党闘争の歴史、民族解放闘争史に関する一切の諸文献と諸資料を収集、整理、保存し、それらを体系的に研究し、党歴史研究に必要な参考文献と諸資料を編纂することにより、党の理論的および実践的な事業に寄与する」ことを、その主要任務に掲げた。その意味でこの研究所は、まさに8月宗派事件以降の正史構築の中核を担うことになったわけである。同研究所は1957年時点で、1)『金日成選集』第3版、2)『朝鮮労働党中央委員会決定集』(公開用)、3) 抗日武装闘争に関する資料集、4) 外国の朝鮮問題に関する文献集、5) 革命歌謡集、6) 抗日武装闘争参加者たちの回想記、7) 戦後経済復旧のための闘争資料集、8) 労働運動資料集などの編集、出版事業を進めていた³。1959年に刊行がはじまった『回想記』は、この6番目(および3番目)に掲げられた事業の成果の一つということになる。

この事業の公式的な位置づけについては、『回想記』第1巻の巻頭に党歴史研究所名義により1959年3月付で記された『『抗日パルチザン参加者たちの回想記』出版に際して』を全訳しておくのがよかろう(下線部は引用者。その意味については後述する)。

朝鮮労働党中央委員会直属党歴史研究所は、抗日パルチザン参加者たちから収集した回想記のなかから、まずその一部を整理し、『抗日

³ 以上については次の文献を参照。김경인 「조선 노동당 력사 연구소 사업에 관하여」 『공산당 및 노동당들의 말씀 - 레닌주의 연구소, 당 력사 연구소, 당 력사 위원회 대표들의 제3차 국제 회의 문헌집』 조선로동당출판사, 1959, pp.346-350. この文献は、1957年11月にブラハで14カ国の共産党・労働党の研究事業代表者たちが集まって開催された国際会議で発表されたものである。

パルチザン参加者たちの回想記』を出版する。

この回想記の筆者たちは、みな過去に自らの革命闘争の行程で直接体験したことや見聞きした事実の一部を何らの虚構もなく、ありのまま叙述した。

この回想記を通じて、われわれは抗日パルチザン参加者たちの素朴で真実の心情を体得することができ、マルクス・レーニン主義の勝利の確固たる信念をもって、祖国光復という大きな道のために闘争する抗日パルチザンの高貴な風貌のあれこれ——革命のための不撓不屈の闘志、人民との堅い連携、重畳たる難関の克服、そのいかなるものとも替えられない革命的同志愛、プロレタリア国際主義精神の立派な具現など——を、どの箇所でも垣間見ることができるだろう。

この回想記は、わが国の全ての勤労者が、金日成元帥を中心とした堅実な共産主義者らによってなしとげられたわが党の高貴な革命伝統を、一層深く研究、体得するのに貴重な資料になると信じている

党歴史研究者は、今後もひきつづき抗日パルチザン参加者たちの回想記を発行する計画である。

この刊行の辞に表れているように、党歴史研究所は、党の正史を構築するために実際のパルチザン参加者から回想記を収集、整理し、それを現代の勤労者たちに思想として「体得」させる教材として活用することを目論んでいた。奥付から発行部数の確認できるものでいえば、第3巻や第6巻は初版から40万部刷られており、相当広く頒布されていたことが分かる。実際、作業班をはじめとしたさまざまな生産単位、職場、党組織で『回想記』の研究会が組織され、学習、発表、討論が繰り返された⁴。その後、『回想記』は年1～2巻のペースで出され、1959年から1963年までの5年間に第8巻まで

⁴ 이종석 『조선로동당연구』 역사비평사, 1995, pp.291-293; 문미라, 前掲論文, pp.253-255。

が発行された。

この時期、『回想記』を再編集したものなど、派生的な書籍が数多く発行された。1961年には『回想記』をもとの半分以下の薄さで再編集した「分冊」シリーズが出ている⁵。また、金日成が育成したとされる少年遊撃隊員および児童団員の回想記だけを集め、少年団員の研究に資することを期した再編集版『若い革命戦士たち』（1960年）も出された⁶。『回想記』から女性たちの闘いをまとめた『パルチザンの女隊員たち』も1960～62年に出された⁷。さらに、『回想記』への寄稿者のうち、キムミョンフワ 金明花、チュヒョソ 崔賢、リムチュンチュ 林春秋らの回想については、「革命伝統研究資料」といった名目のもとでそれぞれ1冊の単行本としてまとめられ、1960～61年に朝鮮労働党出版社から出版された⁸。このほか、抗日運動下での金日成に対する思い出を回想した『人民の自由と解放のために』シリーズや、朝鮮人民軍出版社が1932～40年の戦闘記を当事者の回想によって年代順にまとめた『抗日パルチザン参加者たちの戦闘回想記』全2巻も1959～60年に出ている⁹。1967年にも『回想記』から20篇を撰んだ『いかなる逆境のなかでも』が出ている¹⁰。後述のとおり、のちに鈴木武が独自に『回想記』を分類することのなるが、それはこれら

⁵ 私が参照できたのは分冊1（1961年1月、全9篇）と分冊5（1961年2月、全10篇）のみである。

⁶ 『어떤 혁명 전사들—항일 빨찌산 참가자들의 회상—』(1)、민청 출판사、1960。第2巻以降は未確認である。

⁷ 1960年に『빨찌산의 너 대원들—항일 빨찌산 참가자들의 회상기 중에서—』(조선 녀성사)が出ており、1962年にはその第2巻が出ている。前者は『回想記』から20編を抜粋したもの、後者は抜粋と新規とが混在した全12編の冊子である。

⁸ 金明花、崔賢については、「革命伝統研究資料」シリーズの1および2として、『혁명의 길에서 [革命の道で]』とのタイトルで出版された（1960年）。林春秋は『항일무장투쟁시기를 회상하여 [抗日武装闘争時期を回想して]』とのタイトルで出版された（1960年）。いずれも朝鮮労働党出版社である。

⁹ 『인민의 자유와 해방을 위하여』は朝鮮労働党出版社から1962年に第1、2巻、1967年に第3巻が出された。『항일 빨찌산 참가자들의 전투 회상기』(1)・(2)、조선인민군출판사、1959、1960。第1・2巻とも全21編である。

¹⁰ 『어떤 역경속에서도 (《항일 빨찌산 참가자들의 회상기》 중에서)』 조선로동당출판사、1967。

の再編集版とも一定の共通性が見られ、興味深い。

パルチザン当事者たちが一人称で書いた参加記以外にも、同時期には「通俗書籍」と題されたシリーズ『抗日パルチザン闘争物語』や、「大衆絵本」と題されたシリーズ『抗日武装闘争物語』が出されていた¹¹。歴史と思想をより広い階層に波及させるために、分かりやすい物語としてまとめられたものと考えられる。1964年からは、抗日運動の過程で犠牲となった仲間のことを回想した『革命先烈たちの生涯と活動』シリーズも出された¹²。こうして抗日パルチザン当事者たちの回想と物語は、歴史と道徳譚（共產主義道徳）が渾然一体となった思想教養のテキストとなった。『回想記』はまさにその中心的なテキストに他ならない。

こうして鳴り物入りで出版された『回想記』も、1967～68年には改訂を余儀なくされた。表1にまとめたように、この2年のあいだに『回想記』第1～9巻は「再版」（既に再版があったものは「第3版」）に改められた（以下、これを「改訂版」と呼ぶ）¹³。これに続けて1968～69年に第10～12巻が出されて、『回想記』シリーズは一度完結した¹⁴。こうした初版の改訂と続編の刊行は、一方で相対的には表層的な理由から、他方で極めてポリティカルな理由から進められた。先に前者から述べておけば、1966年に公式の綴字法（正書法）

¹¹ 詳しく調べ切れていないが、『통속 서적] 항일 빨치산 투쟁 이야기』は、第2巻（遊撃根拠地 - 解放地区の創設）が1958年12月に朝鮮労働党出版社から出され、第5巻（김을친著、1959年10月）、第6巻（한근홍著、1959年3月）、第7巻（1960年2月）で、文学者らによって物語スタイルで書かれた。絵本である『[대중 그림책] 항일 무장 투쟁 이야기』は、第5巻（1959年9月）、第7巻（1960年2月）、第9巻（1960年8月）が国立美術出版社から出されていることが確認できている。

¹² 조선 노동당 중앙 위원회 직속 당 력사 연구소『혁명 선렬들의 생애와 활동』1(1964)、2(1965)、조선 노동당 출판사。1969年に第3巻が出ている。

¹³ 第9巻については、初版が1967年4月25日（未見）、再版が同年7月25日であり、わずか3カ月のあいだに改訂されていた。これもその間に甲山系の批判があったためと考えられる。

¹⁴ その後、2003年から全20巻の『回想記』が出版された。『回想記』全般については次の論文を参照：조은희 「역사적 기억의 정치적 활용」 『통일과 평화』 4(2)、2012。

を改めたことによって¹⁵、新たに活字を組み直さなければならなかったからである。広く読まれるべき党の公式文献であるだけに、最も正しい綴り方に合わせなければならなかった。そのおかげで、初版なのか改訂版なのかは、奥付を見なくとも、分かち書きの多さ（より分かち書きの多い方が初版、少ない方が改訂版¹⁶）、サイピョと呼ばれるアポストロフィ（'）の有無（ある方が初版、ない方が改訂版）などによって判別可能である。

表1 『回想記』の諸版および鈴木武の底本

巻	『回想記』の諸版			鈴木武の底本			
	初版	再版	第3版	版	年月日	原本/影印	年月日
1	1959/5/30	1965/6/20	1967/11/30	第3版	1967/11/30	原本	
2	1959/10/10	1966/2/25	1967/12/20	第3版	1967/12/20	原本	
3	1960/7/5	1968/6/20	—	再版	1968/6/20	九月書房	1972/2/8
4	1960/12/20	1968/7/10	—	再版	1968/6/20	九月書房	1971/7/20
5	1961/8/20	未確認	—	初版	1962/2/17	学友書房	1962/2/17
6	1962/1/20	1968/7/15	—	再版	1968/7/15	九月書房	1971/7/20
7	1963/2/20	1968/9/18	—	再版	1968/9/18	九月書房	1971/7/20
8	1963/6/1	1968/9/5	—	再版	1968/9/5	九月書房	1971/7/20
9	1967/4/25	1967/7/25	—	再版	1967/7/25	原本	
10	1968/9/29	—	—	初版	1968/9/29	九月書房	1969/2/20
11	1969/9/20	—	—	初版	1969/9/20	九月書房	1970/10/10
12	1969/11/15	—	—	初版	1969/11/15	九月書房	1970/11/2

より重要なのは1967年以降の政治的大変動である。1967年5月に開催された党中央委員会第4期第15次全員会議で、「唯一思想体系」の徹底した樹

¹⁵ 1966年の新たな綴字法については拙著『北に渡った言語学者』（人文書院、2021、IV章）を参照。

¹⁶ 『回想記』のタイトルにある「抗日パルチザン」も、初版は「항일 빨찌산」と2語に分けていたのに対し、改訂版では「항일빨찌산」と分けずに書いている。

立のために「革命伝統」の幅がさらに狭まり、いわゆる甲山系の指導者らが批判の対象となった。その分、金日成を中心とした中国東北部での抗日運動の位置づけは至上のものとなり、抗日遊撃隊員をモデルに生きようといった一大キャンペーンが展開されることになった。そのため、まさにその隊員たちの生き様、死に様を生々しく描いた『回想記』の価値が一層高まるとともに、「革命伝統」から外れたものと位置づけられた回想は除外される必要があったし、山村で何ら金日成の領導もなく闘っていたかのような記述も改められなければならなくなった。

先ほど長く引用した第1巻の巻頭言の変更点は、この改訂の性格をよく物語っている。引用中で下線を引いた箇所は、1967年改訂版では、それぞれ「われわれは抗日パルチザン参加者たちの革命と首領に対する無限の忠実性、マルクス・レーニン主義の勝利の確固たる信念をもって」および「金日成元帥の領導下で組織展開された抗日武装闘争によりなしとげられた」と改められた。もちろん金日成が、東北抗日聯軍の一朝鮮人部隊を率い、^{ポチョンボ}普天堡などで戦果を挙げた有力なリーダーのひとりであったことは史実である。それを、中国東北部で中国共産党の指導下で闘った抗日パルチザンの朝鮮人隊員が、全て金日成の領導のもとにあり、その隊員たちがみな彼の忠実な部下であったかのように改変したのである。しかも1959年3月の日付はそのまま残してあり、あたかも最初からその趣旨で編まれたかようになっていた。金日成著作集も何度も改訂がおこなわれ、その度に政治的理由などによる改変がおこなわれてきたが、それと同様のことが『回想記』にも施された。

細部にもさまざまな改変が施されたが、ここでは鈴木武の翻訳に影響した3点のみ指摘しておきたい。まず一部の回想記が丸ごと削除された。詳細は末尾の付表を参照いただきたいが、確認できただけで第1～7巻までの計180篇中7篇が消えている（削除のない巻もある）。このうち計3篇が削除された^{チュギチョル}崔基哲は、満洲系のなかでも東北抗日聯軍の第一路軍系が政治指導者

として躍進したことを受けて、1960年代末までに党要職から除外された第二路軍系の指導者のひとりである¹⁷。鈴木武が入手した『回想記』には初版と改訂版が混在しており、後者の場合は初版にあったいくつかの翻訳の対象となっていない。したがって鈴木は合計264話と理解しているが、初版ベースでいえば271話ある。

次に、タイトルが変更されたものもある。たとえば第3巻16話は「《王徳林》老人についての回想」というタイトルだったが、改訂版ではこの名前が消えて「忘れられない老人についての回想」となった。この「老人」は朝鮮人だが、見かけが中国人のようだということで、吉林中国国民救国軍のリーダーとして名を馳せた抗日活動家の名をとって「王徳林」と呼ばれていた。抗日運動における中朝連帯の関係やその雰囲気をよく表すエピソードだが、この王徳林という呼び名についての話が削除され、それに合わせてタイトルも変えられた。ソ連のみならず、中国とも一定の距離をとった独自外交路線を展開していった朝鮮民主主義人民共和国の立場を反映した変更であると考えられる。

最後に、いま述べたこととも重なるが、各話の中身が書き換えられたケースがある。大幅な書き換えはないし、その事由もさまざまであるが、いくつかの話に共通して見られるのは、金日成の領導に関する記述の追加である。たとえば本書の第19話に収録されている「難関を突破して」は改訂版の翻訳だが、その最後の部分（165頁）では、何が難関を突破させたのかという問いに対して、「それはキム・イルソン同志の英明な領導に従う我々の共産主義偉業は必ず勝利するという確固とした信念、億千万べん死のうとも敵を討とうという一念、愛する祖国を踏みにじり、人民を奴隷化する日帝侵略者に対する抑え切れない憤怒が我々の胸に燃えていたからである」とある。この問いに対する答えは、初版では次のようになっていた。

¹⁷和田春樹『金日成と満州抗日戦争』平凡社、1992、pp.377-379。

これは自分たちが遂行している革命偉業に対する無限の矜持と高い責任感から出発したものだったと考える。

我々がもし難関を突破できず、その途中で倒れたならば、愛する祖国と人民の運命は、どうなただろうか…億千万べん死のうとも敵を討つという一念、すなわち愛する祖国を踏みにじり、人民を奴隷化する日帝侵略者に対する抑え切れない憤怒と、キム・イルソン元帥の英明な領導に従う我々の共産主義偉業は必ずや勝利するという確固たる信念だけが、我々の胸に燃えていた。

このように、初版でも金日成の領導については既に言及されていたが、それ以前にまず革命の偉業への矜持と責任感が強調されていた。改訂版ではそのくだりが削除されて、金日成の領導一辺倒になったのである。こうした抗日と革命の原動力を金日成の領導に求める改訂が随所にほどこされた。

以上が原典の改訂だが、鈴木武の訳業に関わって追加しておくべきことは日本での「影印」である。影印とは写真製版で書籍を元のかたちのまま複製することを言う。『回想記』の場合、朝鮮総聯系の出版社である学友書房および九月書房から影印が出されていた¹⁸。表紙をつくりなおしたり、奥付等を入れ替えたりする以外は、内容は基本的に原本のままである。学友書房のものは1961年から初版の影印を出していた。この影印本を使って、各地の朝鮮総聯傘下の分会などで学習会が開かれていた¹⁹。一方、九月書房の方は1969年以降に出されており、第1～9巻については全て改訂版を影

¹⁸ 学友書房は、朝聯と朝鮮人学校の大弾圧があった1949年に創立されたウリトンム社を前身として、1952年に設立された出版社で、教材編纂と出版普及事業をおこなってきた。九月書房は朝鮮民主主義人民共和国の出版物の輸入と普及のために1954年に設立された（呉圭祥『ドキュメント在日朝鮮統一民主戦線1950-1955』ハンマウム出版、2021、pp.432-434）。

¹⁹ 『朝鮮新報』1962.1.24、1962.4.11。문미리前掲論文よれば、こうした在日朝鮮人の動きは『労働新聞』などを通じて本国でも報じられていた。

印したものである。鈴木武が翻訳の底本としたものは、先の表1にまとめたとおりである。

翻訳するということ

釜ヶ崎を拠点に活動していた鈴木武が中国東北部の抗日パルチザンに入れ込みはじめたのは1972年ころのことだった。ちょうどその前年に未来社から『朝鮮人民の自由と解放』とのタイトルで『回想記』の一部が日本語訳されて出版されていた²⁰。鈴木はその本を読んで、「一気にパルチザンのファンになっちゃった」と語る。パルチザンのどこに惹かれたのか聞くと、「人間というのはこれほどまでに強くなれるものなのか」と思いながら読んでいたという。中国東北部の半端でない寒さと飢えのなか、生きるか死ぬかのぎりぎりの線ですっと闘っていた。自分に照らし合わせたら降参していたにちがいないのに、たとえ死のうとも屈しようとしなかったところがすごい。その生の記録を自分の体験として書いているのだから、こんな貴重なものはない。どのような小説にもこのようなものはない。この人たちに比べて、自分たちは何とこんなに弱いのか。この人たちをこれだけ強くしたのは何だったのか。そうしたことを考えながら読んでいたという。

確かにこのパルチザン回想記は単なる戦闘記ではない。「闘う」とは何も銃をもって戦闘するだけでなく、たとえば、ようやく手に入れたトウモロコシを根拠地にいる同志のもとに届けるために、雪のなかをかき分けて歩いていくことも「闘い」である。それはどこか寄せ場で、越冬闘争や生存・占拠闘争などを通じて、生きるために闘っていたことと重なるもので

²⁰ 朝鮮労働党中央委員会党歴史研究所編（翻訳委員会訳）『朝鮮人民の自由と解放：1930年代の抗日武装闘争の記録』未来社、1971。

あったろう。闘いの相手、つまり「敵」も、鈴木武からすれば、単純に今は消えて無くなった過去のものではない。帝国主義との闘いは今日も続いている。名前や形が変わっても、変わらぬ何かを感じながら、鈴木は回想記を読んだ。

パルチザンの姿に惚れ込んだ鈴木は、これをもっと読みたいと思った。解説で整理されているように、鈴木武は1973年ころから独学で朝鮮語を学びはじめ、1974年には朝鮮総聯西成支部の人に週1回のペースで釜ヶ崎の住宅の一室に来てもらい、朝鮮語の講読をおこなった。テキストは『抗日武装闘争時期における金日成同志の教示』²¹で、自分で読み進めて、分からないところを解説してもらい形式で進めたという。そして1974年、大阪生野区の書店（翠松書店）で第3巻と6巻を入手した。その後、なかなか全巻揃えられずにいたところ、1980年に朝鮮総聯尼崎西支部の委員長のおかげで、残りの巻を揃えることができた（解説参照）。

翻訳作業をはじめたのは1977年1月4日のことだった。本の掲載順ではなく、目次を見ながら「これが面白そうだな」というものを思いつくままの順序で選び、訳しながら読んでいった。既に『朝鮮人民の自由と解放』で訳されているものは飛ばして進めた。初期に使っていた辞書は『韓日辞典』と天理大の『現代朝鮮語辞典』だった²²。翻訳をはじめたころに住んでいた場所は、釜ヶ崎の木造2階建てのドヤ「天狗」である。仕事を終え、疲れて帰ってきて、外で酒を飲みながら夕食を済ませたあと、2畳部屋に戻って翻訳作業をおこなった。原本、Campus ノート（図2）、辞書を小さな書き物机いっぱい置き、ボールペンか鉛筆で翻訳を進めていった（付録資料1）。辞書などで調べた語彙については、別途「翻訳ノート」を作成し、よく出

²¹『항일무장투쟁시기의 김일성동지의 교시』 조선로동당출판사、1968。

²²おそらく『韓日辞典』は作家の金素雲の編著によりソウルの徽文出版社から1968年に出されたもの（またはその影印版）であろう。もう一つは天理大学朝鮮学科研究室『現代朝鮮語辞典』（養徳社、1967）であろう。

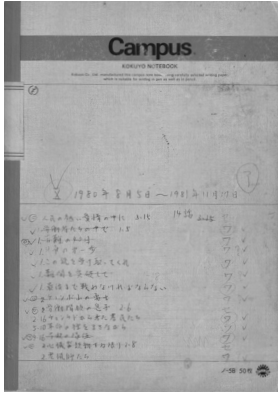


図2 鈴木武の翻訳ノート
(表紙)

てくる語や知らなかった語などを整理していった(付録資料2)。内容に緊張感があるから夢中で翻訳した。眠くなるまで翻訳をしていたので、1日2時間ぐらいできたかどうかというところである。眠くなったら布団を敷いて寝た。

1981年12月から1984年3月までは名古屋の笹日労(笹日島雇労働組合)事務所に移った。そのときも原本、ノート、辞書は持っていった。そこで笹日労の事務所に、いわば居候しながら、時間をみつけては翻訳を進めた。しかし、この時期には翻訳をほとんど進め

ることができなかった。まず、センターに行けば仕事にありつける釜ヶ崎と違って、名古屋では業者と顔なじみでないと仕事を見つけるのは容易でなかった。特に鈴木のような鉄筋工は名古屋で現金仕事がなかなか見つからなかった。また、事務所には人の出入りが絶えず、いつも10人ぐらい、多いときには20人ぐらいが同居していた。翻訳は、ひとりの時間にしか取り組むことができない。それに鈴木は、結成されたばかりの笹日労の書記長を担っていた。^{チヨンテイル}全泰老デー(付録資料5)やキャバレードミンゴ闘争、そのほかの労働相談やトラブルの解決のため、フル稼働している状態で、とうてい翻訳のために時間をとることができなかったのである。

1984年にいちど釜ヶ崎に戻って、ドヤで翻訳を進めるが、1986年1月に山岡強一がヤクザに殺されたことをきっかけに、急遽山谷に移動し、その争議団の活動に加わった。山谷の事務所にいたときは、やはり10人ぐらいが事務所に寝泊まりしていたから翻訳は全く進まなかった。その年の後半にドヤに移ってからは、また翻訳ができるようになった。

山谷の闘争の真っ最中である1986年2月には、あるできごとがひっそり

と起きていた。塚本勲が中心となって編纂した総2,725ページの『朝鮮語大辞典』上・下巻が刊行された²³。刊行記念として半額セール（といっても1万5千円を超える）をおこなっており、鈴木はすぐにそれを入手した。南北の語彙約22万語を集めた大辞典だったので、それまでいくら調べても分からなかったことばも見つかり、これで翻訳が進むようになった。既に翻訳していた回想記も、この大辞典を使って、もういちど清書しながらノートに翻訳しなおした（2度目の翻訳）。この清書の段階になって、鈴木は全訳することを決意するとともに、そのままコピーして仲間に配ることも念頭にレイアウトした（後述）。この段階のノートには、すべて表紙に「清書」と記されている。

1992年6月に、鈴木はまた釜ヶ崎に戻り、太子町の勝浦というドヤで住んだ。このころにも清書しながら翻訳の見直しを進めた。『朝鮮語大辞典』でも分からなかった語については、荒本にある大阪府立図書館に所蔵されていた『標準国語大辞典』も参照した²⁴。この辞書はソウルの国立国語研究院が編纂した3巻本で、収録語彙数は50万語に達している。これでさらに分かった語もあったが、それでも調べのつかない語があり、それはノートに別途抜き出した。

2003年7月、鈴木は東京に引っ越した。90歳近くになっていた母から帰ってきてほしいという電話があったからである。そのころ鈴木はコジマでデスクトップパソコンを買い、店の人に簡単に手ほどきしてもらって、はじめてワープロが使えるようになった。2004年6月、鈴木は広島に移った。そこで中山幸雄が店主をつとめるカフェ・テアトロ・アビエルトに居候した。そのアビエルトにあったパソコンを借りて、鈴木はMS-Wordに『回想記』の全訳を自ら入力しはじめた。これを鈴木は「ワープロ化」と呼ぶ。

²³ 大阪外国語大学朝鮮語研究室『朝鮮語大辞典』上・下巻、角川書店、1986。

²⁴ 국립국어연구원『표준국어대사전』상・중・하、두산동아、1999。

鈴木は「ワープロ化」するに際して、翻訳を見直した（3度目の翻訳）。広島にいるあいだに入力した9冊のノートは、荷物を減らすために現地で廃棄した。

2004年9月に、釜ヶ崎に戻った鈴木は、釜共闘のメンバーのひとりに付き合ってもらって、ジョーシンでパソコンを購入した。そのパソコンで自分の部屋で「ワープロ化」の作業を続けた。2006年9月までに全ての入力を終え、7巻本（以下「翻訳全集」と略す）にまとめあげた（後述）。

この翻訳全集をつくるなかで、鈴木は、これを多くの人に読んでもらうために特選集をつくって図書館に入れたいと思うようになった（後述）。そのために撰んだ28篇については、収録する際にもういちど翻訳を見直した（4度目の翻訳）。鈴木訳が、原典に忠実でありながら²⁵日本語として読みやすいのは、世紀をまたがって何度にもわたって翻訳を見直してきたからに他ならない。

以上、根拠地を転々としながら日本帝国主義と闘ったパルチザンのよう

表2 鈴木武の「流動」と翻訳

時期	1977.1	1981.12	1984.3	1986.1	1986後半	1990.6	1992.6	2003.7
地域	釜ヶ崎	名古屋	釜ヶ崎	山谷		各地転々	釜ヶ崎	東京
場所	ドヤ	笹日労事務所	ドヤ	事務所	ドヤ	—	ドヤ	自宅
翻訳・編集	①翻訳開始 停滞		再開	停滞	②清書開始			

時期	2004.6	2004.9	2006.9	2014.11
地域	広島	釜ヶ崎		
場所	アビエルト	ドヤ		
翻訳・編集	③ワープロ化開始		ワープロ化完了	④特選集

（備考）「時期」は場所の移動または翻訳・編集の開始・完了の時期を示す。

²⁵ ただし解説にもあるとおり、1930年代の状況からすれば非歴史的であると鈴木が考えた金日成の敬称（「司令官」「将軍」など）については「同志」と改めている。

に、鈴木武は「流動的下層労働者」(船本洲治)として寄せ場を渡り歩いて闘いながら、『回想記』の翻訳を進めていった。その軌跡を、分かった範囲でまとめれば表2のとおりである(末尾の付表1も合わせて参照されたい)。

編集するということ

本書にとって鈴木武は、訳者であるだけでなく編者でもある。鈴木は12巻本を全訳しているが、それを7冊の翻訳全集にまとめるに際して、『回想記』の目次をそのまま踏襲することはなかった。特選集の配列もまた独自のものである。並べなおす、撰ぶといった編集行為は決して無色透明のものではなく、そこにも編者の価値づけと思想が自ずと表れる。ここでは鈴木編集のプロセスと、そこでの彼なりのこだわりについて述べたい。

最初自分で読んで学習するために翻訳していた鈴木は、清書するところからそれを人に読ませたいと思うようになった。清書は、そのままコピーすれば冊子になるように形式を整えていた。釜共闘の学習会などの機会に、20人ぐらいには配った。特に反応はなかったというが、このころから「編者」としての鈴木役割ははじまっていた²⁶。

2000年代に入ってから7巻本の編纂作業を進めたが、それにあって鈴木は264篇の回想記を彼なりのしかたで分類した(末尾の付表2および付録資料3を参照)。最初は5つほどに分類していたが、分けているうちに細分化する必要が生じ、最終的に本書冒頭にもあるような13分類となった。分類したのは、読む人が選別しやすいようにするためだった。(1)「銃を取るまで」はパルチザンの一員となるまでの体験、(2)「革命の同志を回想して」は

²⁶ 鈴木武は、『回想記』の翻訳以外にも、韓国での南民戦(南朝鮮民族解放戦線)事件の救援運動にも他の釜共闘の仲間らと関わり、そのとき控訴状などを何人分も翻訳した。その他、韓国の運動などに関するさまざまな資料を翻訳していた。これも実に興味深い、またあらためて論じたい。

亡くなっていった同志の回想、(3)「不屈の女闘士たち」は女性隊員たちによる回想、(4)「革命のつばみたち」は子どもたちの話、(5)「必勝の信念」は信念がなかったら投降していただろうというぎりぎりのところで闘っていた人たちの話、(6)「革命的信義で結ばれた同志たち」は同志愛を主題としたもの、(7)「敵の凶計を粉碎し」は内部に入り込んだスパイとの闘い、(8)「革命の規律」は、たとえば戦利品を自分のものにして批判された経験など、規律を守ることをめぐる教訓譚である。(9)「不敗の隊伍」は、他の分類に入らなかったいろいろなものをまとめているから多くなっている。(10)「抗日統一戦線のために」は、中国人と朝鮮人の統一戦線について、(11)「敵を瓦解させて」は敵の内部での瓦解工作について、(12)「人民の海の中で」は人民大衆のなかでの活動についてそれぞれまとめている、最後のものは結果的に老人の話が多いという。そして最後の(13)「キム・イルソン同志に従って」は金日成が主人公の回想記で、他のものと明らかに性格が異なるので別にした。この順番に特別な意味はないという。

この13分類をもとに7巻の翻訳全集を編集するにあたっての基準としたが、全て順に並んでいるわけではない。主として第1巻は上記の(1)・(2)、第2巻は(3)・(4)、第3巻は(5)・(6)、第4巻は(12)、第5巻は(13)、第6巻は(7)・(8)、第7巻は(10)・(11)や(2)・(13)の一部で構成され、寄せ集めである(9)は第3・6・7巻にまたがって収録された。並んだ順に大した意味は付与しておらず、各カテゴリーはタイトルの五十音順に配列した。これを未来社の『朝鮮人民の自由と解放』と合わせて読めば、『回想記』全話(1967-68年に削除された話を除く)を日本語で読むことができる。

『回想記』の諸版を整理した箇所でも述べたように、平壤においてもテーマ別の再編集版が何種類も出ていた。原典となる『回想記』が規則的に配列されていたわけではないため、目的別に再編集する意義があったのだろう。その意味において、鈴木自身が言うようにカテゴリーの設定や振り分

け方自体は「主観的」なものであったとしても、分類して使いやすい冊子にしようという発想自体は、全く突飛なものではなかったのである。また、そのカテゴリーの分け方も、部分的には平壤で出たものと重なるところがあった。

鈴木は翻訳全集7冊を全てワープロ化するところまではできたが、これをすべて印刷することはできなかった。第1巻から4巻までは、自分で印刷し、買って来た大型ホッチキスで簡易な製本を施したものを7部のみ印刷した。実費分1部700円で仲間に頒布したが、そこまでで翻訳全集の刊行は未完に終わった。

これとは別に、鈴木は28篇を撰び、プリントアウトし、自ら製本した特選集を製作した。特選集では、『回想記』を網羅した翻訳全集に比べ、彼

表3 翻訳全集と特選集の対照

	分類	翻訳全集	特選集	割合
1	銃を取るまで	10	0	0%
2	革命の同志を回想して	25	9	36%
3	不屈の女闘士たち	24	7	29%
4	革命のつぼみたち	12	1	8%
5	必勝の信念	8	4	50%
6	革命的信義で結ばれた同志たち	4	3	75%
7	敵の凶計を粉碎し	4	0	0%
8	革命の規律	3	0	0%
9	不敗の隊伍	59	3	5%
10	抗日統一戦線のために	6	0	0%
11	敵を瓦解させて	4	0	0%
12	人民の海の中で	42	1	2%
13	キム・イルソン同志に従って	41	0	0%
	合計	242	28	

自身のこだわりがはっきり表れた。翻訳全集から28篇を撰定するにあたって、鈴木は決して「バランス」よく抽出してはいない。表3に、13のカテゴリーそれぞれに分類された回想記の数と、そのうち特選集に選ばれた話の数と、その割合を整理した。まず目立つのは(2)と(6)、つまり同志愛である。信念のため、仲間のために自らを捧げて闘う姿を、鈴木はまず大事にしていたことが分かる。もう一つ、インタビューのなかで鈴木が強調していたのは女性闘士たちの話(3)である。「特に女性のところは感動的」だとし、「女性ならではの困難をいかにして乗り越えたかという過程」は、ぜひ読んでもらいたいということで多めに撰んだと語った。

一方、カテゴリーの番号が後ろの方は、ほとんど特選集に入れられていない。絶対数が少ないカテゴリーや、寄せ集めの「不敗の隊伍」はさておき、明確なのは金日成が中心にあるようなものが除外されていることである。「あとでつくった」と思う内容は外し、特に金日成を「司令官同志」と呼んだり、「チェンゲンニム将軍様」と呼んだりしているものは、意図的に除外したという。もちろん鈴木は、抗日パルチザンの部隊長としての金日成を大いに評価しているが、後世の過剰な表現と考えた記述を外したということである。「キム・イルソン同志に従って」(13)をはじめ、子どもの話なども同様の理由で削られている。結果的に、1968年以降に初版が出た第10～12巻の各話は特選集には収録されなかった。『回想記』原典の編集方針が変わっていたことを、鈴木自身はテキストそのものから見抜いていた。

こうしてみると、鈴木武がこだわってきたのは水平的な共闘と連帯であり、そこに見られる同志愛であり、誰かの命令に服従して動くというよりは、誰かのために自律的に行動する姿であり、そしてそうしたもろもろのことを突き動かす原動力は何かという問いであったと考えられる。

2014年11月21日、鈴木はこの自家製の特選集を10部だけ印刷製本した。製本すれば図書館に入れられると考えていたが、出版社から出てISBNや奥付のついたものでないかぎり、そう簡単なことではなかった。東京の朝

鮮総聯幹部とも話してみたが、出版の相談に応じるどころか、むしろ「勝手に翻訳されては困る」と言われたという。金日成と党および共和国の正統性に関わる正典ともいべきテキストであるだけに、日本人の個人訳を組織として容認するわけにはいかなかったのだろう。その意味で本書は文字どおり「ゲリラ的」な非公式訳である。

そうして出版を諦めかけていたところに、寄せ場を研究する都市地理学者の原口剛が現れた。鈴木は「これはチャンス」と思い、インタビューを受けるとともに、特選集の出版について相談した。そうしてできあがったのが本書である。

この、まさしく鈴木武のライフワークというべき本書を単行本化するに際して、私には訳文の「監修」などということは、とうていできなかった²⁷。一字一字が鈴木の道程の痕跡だからである。ただ私がおこなったことは、原典の誕生から本書にいたるまでの事実関係の整理と（本解題）、人名・地名の一覧づくりだけである（付表3、4）²⁸。読者におかれては、鈴木の道程と思いを重ね合わせながら、本書を読み進めていただけると幸いである。

（謝辞）この解題を執筆するにあたって、水野直樹氏から主として資料面で多大な協力を得た。また、原口剛氏からは調査記録を惜しみなく提供していただくとともに、鈴木武氏とのインタビューにも同行していただいた。ここに記して感謝したい。本稿は、JSPS 科研費 JP20H01330の成果の一部である。

²⁷ 鈴木がどう調べてもわからなかったというごく一部の語について、私の方から解釈の提案をした箇所はある。

²⁸ これ以外に、鈴木は地名についてもいくつかの地図と対照して漢字表記を抜き出したこともあったが、これは途中で断念したという。実際、中国東北部の地名を現地の発音で朝鮮語表記したものや、漢字を朝鮮語読みしたものなど、もともとの地名を復元するのが困難なものも多い。

付表

付表1 特選集の構成と鈴木武の翻訳時期

章	タイトル	巻	話	翻訳		清書		Word 入力
				No	時期	No	時期	
1	オ・ウンリョン同志を回想して	9	10	5	84.11.17～11.19	—	—	04.4.17
2	「死んでも一緒に死に生きても一緒に生きよう」	9	14	6	84.12.31～85.1.1	—	—	05.1.6
3	共産党員ウィトンム	7	13	—	—	—	—	03.11.12
4	この背のうを同志たちに	5	14	6	84.12.6～12.7	—	—	04.7.15
5	バルチザンの英雄キム・ゼントナム	5	12	5	84.11.5～11.8	—	—	04.7.5
6	不屈の闘士	2	10	4	81.12.18～82.7.30	—	—	04.4.21
7	労働者階級の息子	2	6	3	80.10.9～10.18	18	1991	05.9.25
8	忘れられないカン・ナムソン同志	4	13	—	—	21	—	—
9	忘れられないチャントナム	7	8	1	1979	—	—	04.3.6
10	明けてくる明日のために	5	19	10	85.8.20～8.21	—	—	06.1.14
11	タバチョンの密営で	7	20	11	86.1.1～1.3	—	—	06.3.30
12	トンファの樹林の中で	1	13	4	81.11.29～12.9	12	1986	04.8.30
13	中隊の姉	6	7	—	—	21	—	05.7.6
14	バルチザンの女将軍	4	6	2	1979	—	—	—
15	未来の幸福のために	4	28	—	—	12	1986	04.8.16
16	遊撃隊の娘	9	18	6	85.1.1～1.2	—	—	05.1.17
17	死線を突破して	6	23	—	—	15	1990	03.11.9
18	トゥマン江の氷塊をかき分けて	7	9	2	1979	—	—	—
19	難関を突破して	1	18	3	80.9.2～9.25	—	—	04.3.23
20	任務を遂行するまで	7	12	1	1979	—	—	04.4.7
21	熱い心臓	2	22	—	—	—	—	04.6.27
22	熱い同志の愛情で永遠に生きよう	4	15	4	83.9.24～84.3.16	—	—	05.12.13
23	艱苦の日々に	6	9	—	—	21	—	05.7.9
24	インターナショナルの歌声を聞くたびに	4	14	4	81.11.19～11.22	—	—	04.4.18
25	革命の道	4	8	—	—	16	1990	03.11.14
26	ロルリ河ほとりの勝利	3	19	8	85.2.20～2.21	—	—	05.12.11
27	ボンナミとともに	7	21	—	—	—	—	05.8.25
28	死に打ち勝ったチョチャンヂュ	6	4	1	1979	—	—	04.4.11

(備考)「章」は特選集の番号、巻・話は鈴木が参照した原典の第○巻第○話を示す。「翻訳」は、翻訳ノートの番号と翻訳時期(明記されている場合のみ)を記した。「清書」はノートへの清書で、そのノートの番号と表紙に記された年を記した。「Word 入力」は、鈴木 Word への入力が完了した日付である。

付表2 『回想記』 初版と鈴木武翻訳全集の対照

初版(朝鮮語)			鈴木武全訳					
話	題名	著者名	話	題名	著者名	カテゴリ	全集	特選集
第1巻 (1959)			第1巻 (1967=改訂版)					
1	잊을 수 없는 첫 상봉	최 현	1	[忘れられない初対面]	[崔賢]			
2	잊지 못할 5.1절	김춘추	2	[忘れられないメーデー]	[林春秋]			
3	한 홉의 미시'가루	백학림	3	[一合のはったい粉]	[白鶴林]			
4	로혹산에서의 승리	김려중	4	로프ク山での勝利	킴·리요철쑤	13	5	
5	로동자들 속에서	박성철	5	労働者たちの中で	박·송철쑤	12	4	
6	연길 폭탄	박영순	6	ヨンギル爆弾	박·송스	9	6	
7	투쟁의 첫 걸음	리봉수	7	闘争の第一歩	리·보스	1	1	
8	장백원 사람들	김정필	8	チャンバク県の人々	킴·첸빈	12	4	
9	투기우즈의 인민들	허봉학	9	トゥゴウチュの人民	호·보스	12	4	
10	산진막의 노인	윤태홍	10	山畑小屋の老人	윤·첸	12	4	
11	무지허에서	김유길	11	ムチホで	킴·유기	12	4	
12	연강에서의 개가	조도연	12	ヨンヅプ江での凱歌	첸·도	9	6	
13	돈화의 수미 속에서	김명화	13	トンファの樹林の中で	킴·민쑤	3	2	12
14	동지들! 이 총을 받아 주!	리좌혁	14	同志たち! この銃を受け取ってくれ!	킴·첸	9	6	
15	대오를 찾아서	리두관	15	隊伍を訪ねて	리·도우첸	9	3	
16	《치도》에 대한 이야기	김철호	16	〈刺刃〉 についての話	킴·첸	3	2	
17	고난의 40일	김철호	17	苦難の四十日	킴·첸	3	2	
18	난관을 뚫고	지경수	18	難関を突破して	치·기	5	3	19
19	끝까지 싸워야 한다	손종준	19	最後まで闘わなければならない	송·첸	9	3	
20	고귀한 은정	박성철	20	高貴な恩情	박·송철쑤	12	4	
21	무장을 위하여	리봉수	21	武装のために	리·보스	9	6	
22	길은 하나이다	주도일	22	道は一つだ	첸·도	1	1	
23	단합된 힘	최기철	[改訂版で削除]					
24	소년 유격대원들	김춘추	23	少年遊撃隊員たち	림·첸	4	2	
25	오풍둥에서	리봉록	[改訂版で削除]					
26	유격대의 군의	박성우	24	遊撃隊の軍医	박·송	9	6	
第2巻 (1959)			第2巻 (1967=改訂版)					
1	필승의 신념	진문섭	1	[必勝の信念]	[全文變]			
2	조국에로 진군하던 길에서	백학림	2	祖国に進軍する道で	박·한림	13	5	
3	보천보 전투	오백룡	3	ボチョンボ戦闘	오·벤	9	6	
4	공청원 리 순희 동무	김옥순	4	共靑員リ・スニトムム	킴·옥	3	2	
5	천보산의 용사	최 현	5	チョンボ山の勇士	첸·히	2	1	
6	로동 계급의 아들	김자린	6	労働者階級の息子	킴·첸	2	1	7

初版 (朝鮮語)			鈴木武全訳						
話	題名	著者名	話	題名	著者名	カテゴリ	全集	特選集	
7	목단강을 건너서	허봉학	7	モクタン江を越えて	ホ・ボンハク	9	6		
8	심장이 고동 치는 한	윤태홍	8	心臟が鼓動する限り	ユン・テホン	9	3		
9	고난의 행군	조도연	9	苦難の行軍	チョ・ドオン	9	3		
10	불굴의 투사	림춘추	10	不屈の闘士	림・춘츄	2	1	6	
11	림강현 의차구 전투	박성철	11	림강현エチャグ戦闘	박・송춘요	9	3		
12	내두산에서	박영순	12	ネドウ山で	박・요스	12	4		
13	오이밭에 할아버지	김룡연	13	きゅうり畑のおじいさん	김・리요	12	4		
14	사냥꾼 로인들	김명숙	14	老獵師たち	김・미요스	12	4		
15	배움의 첫 걸음	오백룡	15	学びの第一歩	오・베리	13	5		
16	청년 공작원들에게 주신 그이의 말씀	박영순	〔改訂版で削除〕						
17	전라도에서 온 농민들	박영순	16	チョルラ (全羅) 道から来た農民たち	박・요스	12	4		
18	인민을 사랑하시는 마음에서	허봉학	17	人民を愛される気持ちで	호・보	13	5		
19	인민의 것이라면	손종준	18	人民のものならば	송・조	12	4		
20	증오의 반격	박성철	19	憎悪の反撃—チンチャン戦闘を回想して—	박・송춘요	9	3		
21	불무지 보조	리오송	20	焚き火歩哨	리・오	13	5		
22	철구 어머니	백학림	21	チョルグオモニ	박・한림	3	2		
23	뜨거운 심장들	김룡연	22	熱い心臟	김・리요	6	3	21	
24	재봉대원들	김명숙	23	裁縫隊員たち	김・미요스	3	2		
25	심장의 나팔 소리	김자린	24	心臟のラッパの音	김・차린	9	6		
26	인민과 군대의 생명 재산을 목숨으로 지킵시다!	김자린	25	人民と軍隊の生命財産を命を賭けて守りましょう	김・차린	3	2		
27	세 아동에 대한 이야기	박영순	26	三人の児童についての話	박・요스	4	2		
第3巻 (1960)			第3巻 (1968=改訂版)						
1	그이는 우리를 이렇게 믿어 주시었다	백학림	1	キム・イルソン同志は我々をこのように信じてくださった	박・한림	13	7		
2	하나로 뭉친 힘	박두경	2	一つに団結した力	박・투	9	6		
3	총가뭇에 대한 이야기	최 광	3	銃床に関する話	최・관	13	5		
4	조국 진군의 길에서 맞은 설	한원추	4	祖国進軍の道で迎えた正月	한・춘츄	9	7		
5	위대한 사상에 고무되어	김성국	5	偉大な思想に鼓舞されて	김・성	5	3		
6	오 증후 동지를 회상하여	오백룡	6	オ・チュンフブ同志を回想して	오・베리	2	1		
7	선렬들에게 바치는 맹세	오백룡	7	革命先烈に捧げる誓い	오・베리	9	3		
8	혁명의 승리가 보인다! (혁명투사 최희숙동무를 회상하여)	김명화	8	革命の勝利が見える! —革命闘士チェ・フィスクトンを回想して—	김・미요	3	2		

初版 (朝鮮語)			鈴木武全訳					
話	題名	著者名	話	題名	著者名	カテゴリ	全集	特選集
9	광명의 길을 찾아서	김명준	9	光明の道を求めて	김ム・미ョン췌운	10	7	
10	첫 행군의 날에	조명선	10	初行軍の日に	췌오・미ョン췌온	9	6	
11	로야랑의 외딴집 로인들	박영순	11	ロヤランの一軒家の老人たち	박ク・욘스ん	12	7	
12	밀림속의 명절	백학립	12	密林の中の祝日	베크・한리ム	9	6	
13	목재 노동자들	김좌혁	13	木材労働者たち	김ム・췌야히ョク	12	4	
14	왕우구 인민들	김자린	14	왕우구의人民	김ム・췌야리ん	12	4	
15	인민들의 뜨거운 사랑 속에	김철호	15	人民の熱い愛情の中で	김ム・췌올호	12	4	
16	《왕 덕림》로인에 대한 회상	리오송	16	忘れられない老人についての回想	리・오췌온	12	4	
17	또다시 압록강을 건너서	김성국	17	再びアムノク江を越えて	김ム・송강ク	13	5	
18	총검의 숲을 헤치고 국내에로	박성철	18	銃剣の林をかき分けて国内へ	박ク・췌ん췌올	12	4	
19	롤리하 강반의 승리	최민철	19	롤리하ほとりの勝利	췌예・민췌올	9	3	26
20	적들의 흉계를 부시고	윤태홍	20	敵の凶計を打ち砕き	윤・테洪ん	7	6	
21	가가영에서의 공작	김동규	21	カガヨンでの工作	김ム・돈규	11	7	
22	첫 시련	박두경	22	初試練	박ク・투규ョん	1	1	
23	유격대에 입대하기까지	김자린	23	遊撃隊に入隊するまで	김ム・췌야리ん	1	1	
24	단결의 힘	김철호	24	団結の力	김ム・췌올호	12	4	
25	공청원의 심장	조동욱	〔改訂版で削除〕					
第4卷 (1960)			第4卷 (1968=改訂版)					
1	그이는 우리를 당의 아들로 이렇게 키워 주셨다	김룡연	1	김ム・일췌온同志は我々を党の息子としてこのように育ててくださった	김ム・리ョんヨん	13	5	
2	누룩에 담긴 이야기	한익수	2					
3	아버이의 사랑	리오송	3	親の愛情	리・오췌온	13	5	
4	간삼봉 전투를 회상하여	최 현	4	カンサムボン戦闘を回想して	췌예・히ョん	9	6	
5	살아서 끝까지 싸워야 한다	리명선	5	生きて最後まで戦わなければならない	리・미ョん췌온	5	3	
6	빨찌산의 너 장군	황순희	6	パルチザンの女將軍一ホ・ソンスクトムを回想して—	ファン・스니	3	2	14
7	리 신금 동지에 대한 회상	임 철	7	리・싱금ム同志についての回想	임ム・췌올	3	2	
8	혁명의 길	박경옥	8	革命の道	박ク・キョん옥	9	3	25
9	한 토리의 털실	안정숙	9	卷きの毛糸	안・췌ョん스ク	8	6	
10	배낭 속의 떡	정병갑	10	背のうの中の餅	췌ョん・비ョん갸브	8	6	
11	우리는 굴하지 않았다	김명숙	11	私たちは屈しなかった	김ム・미ョん스ク	3	2	
12	대오를 기다리며	허창숙	12	隊伍を待ちながら	호・췌안스ク	3	2	

初版 (朝鮮語)			鈴木武全訳					
話	題名	著者名	話	題名	著者名	カテゴリ	全集	特選集
13	잊혀지지 않는 강 남송 동지	박영순	13	忘れられないカン・ナムソン同志	パク・ヨンスン	2	1	8
14	인터내쇼날의 노래 소리를 들을 때마다	김병식	14	インターナショナルの歌声を聞くたびに	キム・ビョンシク	9	3	24
15	뜨거운 동지의 사랑으로 영원히 살자!	박두경	15	熱い同志の愛情で永遠に生きよう!	パク・투그يون	6	3	22
16	붉은 군대와 더불어	오백룡	16	祖国解放のための聖戦に参加して	오・벤리ョン	9	6	
17	프로레타리아 국제주의 기치 높이 들고	김자린	17	プロレタリア国際主義の旗を高くかかげて—ファジョン県ヨチャ戦闘を回想しながら—	김・차린	9	3	
18	인민의 충복	김지명	18	人民の忠僕	김・지뮌	12	4	
19	잊을 수 없는 《세계》	오재원	19	忘れられない人たち	오・제우온	12	4	
20	한 중국 로인에 대한 이야기	박두경	20	チャン老人についての話	パク・투그يون	12	4	
21	목단강 사람들	오재원	21	モクタンガンの人々の中で	오・제우온	12	4	
22	원수는 간악하다	전순희	22	敵は奸悪だ	쵸ン・스니	7	6	
23	산림 부대 속에서	김지명	23	山林部隊の中で	김・지뮌	10	7	
24	호란하 강반에서 있는 일	안정숙	24	ホラン河のほとりであったこと	안・죠크스	9	6	
25	동지의 뜻을 이어	리정인	25	同志の意志を受け継いで	리・죠크인	3	2	
26	잊지 못할 목단강	왕옥환	26	革命の初試練	우안・오쿠안	3	2	
27	리 화순 동무의 최후	황순희	27	リ・ファスントムムの最後	후안・스니	4	2	
28	미래의 행복을 위하여	리영숙	28	未来の幸福のために	리・죠크스	3	2	15
29	혁명의 꽃봉오리들	박영순	29	革命のつぼみたち	박・ヨンスン	4	2	
30	붉은 꽃	류명옥	30	赤い花	리유・뮌옉	4	2	
第5巻 (1961)			第5巻 (1961=初版)					
1	두 번째 상봉	최 현	1	二度目の対面	쵸・히ョン	13	5	
2	공산당원의 영예를 지니기 까지	김성국	2	共産党員の榮譽をになうまで	김・송그	9	6	
3	그이는 우리의 어버이이다	황순희	3	[わたしたちの父、金日成同志]	[黃順姬]			
4	관지 부근에서 있는 이야기	리두관	4	クワンヂ付近であった話	리・도우찬	13	5	
5	사랑관도 인민의 아들	오백룡	5	[[司令官として人民の息子です]]	[吳白龍]			
6	혁명의 투지로, 사랑 동지의 의지와 신념으로 그는 싸웠다 (권 영벽 동지를 화상 하여)	황금옥	6	命の闘志で、師長同志の意志と信念で彼は闘った—クオン・ヨンビョク同志を回想して—	후안・가모	2	1	
7	조국 광복의 해불	황금옥	7	祖国光復のかがり火	후안・가모	12	4	

初版 (朝鮮語)			鈴木武全訳					
話	題名	著者名	話	題名	著者名	カテゴリ	全集	特選集
8	유격대는 어디에서나 인민을 떠나서는 살 수 없었다	김창봉	8	遊撃隊はどこでも人民を離れては生きることができなかった	キム・チャンボン	12	4	
9	군중을 설복 교양하여	박성철	9	大衆を説得教育して	박・송 chorl	12	4	
10	혁명의 씨앗을 뿌리며	박두경	10	革命の種を蒔きながら	박・투 chorl	12	4	
11	속새골 로인	임 철	11	ソクセ谷の老人	임・chorl	12	4	
12	빨찌산의 영웅 김 진 동무	오진우	12	빨찌산の英雄キム・チントンム	오・즈나	2	1	5
13	죽음을 이겨 낸 힘	김성국	13	死に打ち勝った力	김・송 chorl	5	3	
14	이 배낭을 동지들에게 (류 치수 동지를 화상하여)	김충렬	14	この背のうを同志たちに(リュ・チ수同志を回想して)	김・춘 chorl	2	1	4
15	동지들의 뜨거운 사랑	리오송	15	同志たちの熱い愛情	리・오 송	6	3	
16	공동의 원수를 반대하여	박영순	16	共同の敵に反対して	박・영 순	9	6	
17	삼엄한警戒망을 뚫고	김자린	17	厳しい警戒網を抜けて	김・자 린	9	6	
18	첫 시련	황순희	18	初試練	황・순 희	3	2	
19	밝아올 래일을 위하여	리영숙	19	明けてくる明日のために	리・영 숙	3	2	10
20	위만군을 설복하여	김충렬	20	偽滿軍を説得して	김・춘 chorl	11	7	
21	《온 서장》이 택한 길	최 현	21	〈オン署長〉が選んだ道	최・현	11	7	
22	공청원 《강차위》	김좌혁	22	共靑員〈カンチャウィ〉	김・좌 혁	2	1	
23	참된 아동단원	최 광	23	眞の兒童団員	최・광	4	2	
24	왕 소년을 아동단에 입입하기까지	최 광	24	ワァン少年を兒童団に引き入れるまで	최・광	4	2	
第6卷 (1962)			第6卷 (1968=改訂版)					
1	그이의 높은 뜻을 받들고	김좌혁	1	〔金日成同志の高い志にみちびかれて〕	〔金佐赫〕			
2	북만원정의 길에서	오진우	2	〔北滿州遠征の途上で〕	〔吳振于〕			
3	원수들의 흥계를 앞질러	한원추	3	敵の凶計に先制し	한・원 추	13	5	
4	죽음을 이겨낸 처장즈	백학림	4	死に打ち勝ったチョチャンヂュ (車廠子)	백・학 림	12	4	28
5	그는 일당백의 혁명전사였다	박성철	5	彼は一当百の革命戦士だった	박・성 철	2	1	
6	류 정수 동지를 화상하여	김창봉	6	彼は確固とした共產主義者だった	김・창 봉	2	1	
7	그는 끝까지 굴하지 않았다	조도연		〔改訂版で削除〕				
8	중대의 누나	윤태홍	7	中隊の姉	윤・태 홍	3	2	13
9	어느 때 어디서나 투쟁을 멈출 수 없다	한원추	8	いつでもどこでも闘争を止めることはできない	한・원 추	5	3	
10	간고한 나날에	박성철	9	艱苦の日々に	박・성 철	6	3	23
11	한 마음 한 뜻으로 뭉쳐	최기철		〔改訂版で削除〕				

初版(朝鮮語)			鈴木武全訳					
話	題名	著者名	話	題名	著者名	カテゴリ	全集	特選集
12	기어코 나의 조국을 해방하리라	김성국	10	必ず私の祖国を解放する!	キム・ソングク	9	6	
13	인민은 유격대를 피로써 도왔다	오백룡	11	人民は遊撃隊を血でもって助けた	오・벤리ョン	12	4	
14	원수를 몰아내고 꼭 돌아오리라	임철	12	敵を追い出してきつと帰ってきます	이ム・쵸르	12	4	
15	따라라미의 밀밭에서	안정숙	13	タラロミの密営で	안・죤스쿠	3	2	
16	적들을 와해시켜	최현	14	敵を瓦解させて	츠허・히ョン	11	7	
17	불타는 복수의 일념으로	박성우	15	燃える復讐の一念で	박・송우	1	1	
18	나는 이렇게 유격대원이 되었다	유창권	16	私はこのようにして遊撃隊員になった	유・창궁온	1	1	
19	미래의 참다운 주인공이 되라	리오송	17	未来の真の主人公になりなさい	리・오송	13	5	
20	원수들에게 숨 돌릴 기회를 주지 말아야 한다	허봉학	18	敵に息つく機会を与えてはならない	호・بون학	9	6	
21	총 한방 쓰지 않고	손종준	19	銃一発撃たずに	송・죤쵸츄ン	13	5	
22	울기강에서	조명선	20	オルギ江で	쵸・미ョン송	13	7	
23	적의 약점을 간파하고	윤태홍	21	敵の弱点を看破して	윤・태홍	9	6	
24	우복동의 불길	박영순	22	ウボクトンの炎	박・영순스	9	3	
25	사선을 뚫고	김충렬	23	死線を突破して	김・쵸운리요르	5	3	17
26	철성하 전투	최민철	24	チルソンハ戦闘	츠허・민쵸르	9	3	
第7巻 (1963)			第7巻 (1968=改訂版)					
1	《하자고 결심만 하면 못 해 낼 일 없다》	박영순	1	「しようど決心さえすればできないことはない」	[朴英淳]			
2	혁명의 기치를 끝까지 고수 하시여	진문섭	2	革命の旗を最後まで固守して	쵸ン・ムン소프	13	5	
3	시장에서의 승리	백학립	3	ソガンでの勝利	백・한림	13	5	
4	그이가 혁명의 진두에 서게 시기에	박성철	4	キム・イルソン同志が革命の陣頭に立っておられるために	박・송쵸르	13	5	
5	속영지에서 있는 일	김룡연	5					
6	옥란이는 다시 눈을 떴다	김옥순	6	オンランは再び目を開けた	김・옥순	13	5	
7	《내 몫까지 원수를 쳐 달라!》	최 광	7	「私の分まで敵を討ってくれ」	츠허・그안	9	3	
8	잊지 못 할 장 동무	김양춘	8	忘れられないチャントンム	김・양춘쵸ン	2	1	9
9	두만강의 얼음'장을 해치고	김동규	9	トウマン(豆満)江の氷塊をかき分けて	김・돈규	5	3	18
10	연길 감옥에서의 공작	최 현	10	ヨンギル監獄での工作	츠허・히ョン	12	7	
11	푸수궁에서의 격투	김룡화	11	プスグンでの激闘	김・리온푸아	9	3	
12	인무를 수행하기까지	장상룡	12	任務を遂行するまで	장・산리요ン	5	3	20

初版 (朝鮮語)			鈴木武全訳					
話	題名	著者名	話	題名	著者名	カテゴリ	全集	特選集
13	공산당원 위 동무	윤태홍	13	共産黨員ウィトナムム	ユン・テホン	2	1	3
14	구대원의 보살핌 속에서	진문옥	14	古參隊員の世話の中で	チョン・ム낙	9	6	
15	혁명의 한 길에서	박광선	15	革命の一つの道で	박・ク안ソン	10	7	
16	《감산 들찌》에 대한 이야기	황승희	16	〈トルチ〉に関する話	ファン・스니	12	4	
17	인민을 위함이라면	리중산	17	人民のためならば	리・죠히안	9	6	
18	당의 위임을 받고	홍훈수	18	救国軍部隊に入って	ホン・츄ンス	10	7	
19	비밀은 생명이다	최기철	〔改訂版で削除〕					
20	원수는 승냥이다	황금옥	19	敵はやマイヌだ	ファン・그모크	12	4	
21	다반촌 밀영에서	진순희	20	타반츄온密営で	チョン・스니	3	2	11
22	북남이와 함께	김철호	21	ボンナミとともに	킴・츄올호	4	2	27
第8卷 (1963)			第8卷 (1968=改訂版)					
1	한 대원의 건강을 넘려하시여	최인덕	1	一隊員の健康を心配されて	츄에・인드크	13	5	
2	몸소 기관총을 잡으시고	진문섭	2	自ら機関銃を握り	츄온・ムン소프	13	5	
3	인민의 리익을 위하시는 마을에서	박영순	3	人民の利益のためを思って	박・욘스문	12	4	
4	만강에서의 연예공연	김동규	4	マンガンでの演芸公演	킴・돈그유	13	5	
5	어느 한 목재소에서	김명화	5	ある木材所で	킴・미욘프아	13	5	
6	원수들의 흥계를 간파하시고	김용연	6	敵の凶計を看破して	킴・리욘욘	13	5	
7	혁명의 승리를 확신할 때	서철	7	革命の勝利を確信する時	쑤・츄올	9	3	
8	항일의 기치 하에	석산	8	抗日の旗の下に	쑤크・산	10	7	
9	그 이의 가르침을 받들어	윤태홍	9	킴・일손同志の教えを掲げて	유ン・테ホン	9	6	
10	끊을 수 없는 혈육의 정	오백룡	10	断つことのできない血肉の情	오・벤리욘	12	4	
11	김 정숙 동지를 회상하여	김명화	11	〔金貞淑同志を回想して〕	〔金明花〕			
12	그는 오늘도 우리와 함께 있다 (박 록کم 동지를 회상하여)	황금옥	12	彼女は今日も私たちとともにいる —박・로크کم同志を回想して—	판・그모크	3	2	
13	불굴의 녀 투사 한 주애 동지	박경숙	13	不屈の女闘志ハン・츄에同志	박・키욘오크	3	2	
14	총을 잡기까지	박경숙	14	銃を取るまで	박・키욘스크	1	1	
15	오늘의 행복을 느낄수록 과거를 잊지 말자!	리오송	15	今日の幸福を感じるほど過去を忘れてはならない!	리・오송	1	1	
16	무산자가 갈 길은 오직 한 길—혁명의 길 밖에 없다	최봉호	16	無産者が生きる道はただ一つ—革命の道のほかにない	츄에・بون호	1	1	
17	총에 대한 회상	박성철	17	銃についての回想	박・송츄올	9	6	
18	입대 후 첫 전투 총화	한태룡	18	入隊後の初戦闘総括	한・테리욘	9	6	
19	명사수의 말	지병학	19	名射手の言葉	치・피욘하크	9	6	

初版 (朝鮮語)			鈴木武全訳					
話	題名	著者名	話	題名	著者名	カテゴリ	全集	特選集
20	혁명의 요구라면 못 해 낼 일이 없다	송승필	20	革命の要求ならばできないことはない	ソン・スンピル	9	3	
21	불의의 정황 속에서	태병렬	21	不意の状況の中で	테·비ョン리요르	9	3	
22	행군 도상에서 있는 일	박우섭	22	行軍途上であったこと	박·우소프	12	4	
23	잊지 못할 김 로인 일가	오죽순	23	忘れられないキム老人一家	오·츠크스민	12	4	
24	지 불팔 로인의 최후	김룡연	24	チ・ボンバル老人の最後	키ム·리요ン요ン	12	4	
25	참된 아동단원 전 기옥 소년	리국진	25	真の児童団員チョン・ギオク少年	리·그ッチン	4	2	
26	한 산림 부대 속에서	김양춘	26	ある山林部隊の中で	키ム·얀츄ン	10	7	
第9巻 (1967)			第9巻 (1967=初版)					
1	크나한 신임	오백룡	1	絶大な信任	오·벤리요ン	13	5	
2	《후방사업은 곧 정치사업이다》	김동규	2	後方活動はすなわち政治活動である	키ム·돈гы	13	5	
3	항상 부대관리를 알뜰하게 하여	전문섭	3	常に部隊の管理をしっかりとやり	치요ン·ムン소프	13	5	
4	원개의 가루봉지에 깃든 사랑	리을설	4	[五十の紙袋にこめられた愛]	[李乙雪]			
5	사령부를 찾아가는 길에서	오백룡	5	[司令部をたずねていく途上で]	[呉白龍]			
6	명령은 무조건 끝까지 관철해야 한다	오백룡	6	命令は無条件最後まで貫徹しなければならない	오·벤리요ン	9	6	
7	불사조	리두수	7	[不死鳥]	[李斗洙]			
8	우리는 이렇게 무장을 잡았다	리용구	8	我々はこのように武器を取った	리·요ంగా	1	1	
9	항쟁해동지를 회상하여	허봉학	9	ファン・チョンへ同志を回想して	호·ボンhak	2	1	
10	오송화동지를 회상하여	최민철	10	오·운리요ン同志を回想して	체·민치요르	2	1	1
11	그는 항상 전투에서 령활하고 대답하였다	최인덕	11	彼は常に戦闘に巧みで大胆だった	체·인드크	2	1	
12	안순화동무의 최후	리봉수	12	안·스프아트놈의最後	리·보נס	3	2	
13	한 생명을 위하여 천리	리봉수	13	一つの生命のために千里	리·보נס	9	7	
14	《죽어도 같이 죽고 살아도 같이 살자》	김병식	14	「死んでもいっしょに死に、生きてもいっしょに生きよう」	키ム·비요ン시크	2	1	2
15	위만군으로 가장하여	최민철	15	偽満軍に変装して	체·민치요르	9	6	
16	불패의 대오	안영	16	不敗の隊伍	안·요ン	9	3	
17	규율은 어려운 때일수록 더 잘 지켜야 한다	장상룡	17	規律は困難な時ほどいっそうよく守らなければならない	찬·산리요ン	8	6	

初版(朝鮮語)			鈴木武全訳					
話	題名	著者名	話	題名	著者名	カテゴリ	全集	特選集
18	유격대의 딸	리정인	18	遊撃隊の娘	리·죠논인인	3	2	16
19	참된 아동단원 금순이	김옥순	19	眞の兒童団員 gumsun	김·옥스순	4	2	
第10卷(1968)			第10卷(1968=初版)					
1	《혁명적 피줄기를 이어갈 후비대를 튼튼히 키워야 합니다》	박영순	1	〔革命の血すじをうけつぐ後継者をしっかりと育てなければならぬ〕	[朴英淳]			
2	사랑관동지의 육친적인 사랑과 보살핌속에서	최인덕	2	司令官同志の肉親的な愛情と配慮の中で	첸·인도크	13	5	
3	《혁명이든 항상 혁명의 초소를 가리지 말아야 한다》	박정숙	3	革命家は常に革命の哨所を選び好みしてはならない		13	5	
4	사랑관동지의 두터운 신임과 보살핌 속에서	장철구	4	〔司令官同志のあつい信任といつくしみのなかで〕	[張チョルグ]			
5	사랑부를 보위하여	한익수	5	〔司令部を守って〕	[韓益湊]			
6	사랑관동지의 가르침을 받들고	김동규	6	〔司令官同志の教えをかかげて〕	[金東奎]			
7	오직 사랑관동지의 혁명사상과 의지대로(류경수동무를 회상하여)	최 현	7	ただ司令官同志の革命思想と意志の通りに(リュ・ギョンストムを回想して)	첸·히ョン	2	7	
8	혁명적출판물 —《3.1월간》	김경석	8	革命的出版物 —《三・一月刊》	김·기요스노크	9	6	
9	그는 언제나 사랑관동지의 명령 집행에 충실하였다(오중홍동지를 회상하여)	김철만	9	彼はいつも司令官同志の命令の執行に忠実だった(オ・チュンフフ同志を回想して)	김·쵸르말만	2	1	
10	혁명의 사랑부를 보위하기 위하여	리두수	10	革命の司令部を保衛するために	리·도우스	7	7	
11	오직 그의 가르침대로(최춘국동지를 회상하여)	고현숙	11	ただ김·일손同志の教えの通りに(첸·쵸운그크同志を回想して)	코·히요스스크	2	7	
12	군민일치의 혁명적기풍을 견지하여	석동수	12	軍民一致の革命的気風を堅持して	소크·토스	12	4	
13	언제 어디서나 혁명적 경각성을 높여야 한다	김대홍	13	いつでもどこでも革命的警戒心を高めなければならない	김·데혼	7	6	
14	불굴의 투쟁정신으로(오응룡동지를 회상하여)	김룡화	14	不屈の闘争精神で(오·운리요同志を回想して)	김·리요프	2	1	
15	전원출동무의 최후	리용구	15	チョン・ウァンチュルトムムの最後	리·요ング	4	2	
第11卷(1969)			第11卷(1969=初版)					
1	혁명적사업방법의 위대한 모범을 창조하시어	오백룡	1	革命的活動方法の偉大な模範を創造して	오·벤리요	13	5	
2	진정한 인민의 정권—인민혁명정부를 세우시어	전창철	2	〔眞の人民の政権—人民革命政府をうちたてて〕	[田昌哲]			

初版(朝鮮語)			鈴木武全訳					
話	題名	著者名	話	題名	著者名	カテゴリ	全集	特選集
3	《전체 인민이 무장하면 어떠한 원수도 능히 물리칠수 있다》	오진우	3	「全ての人民が武装すればどんな敵でも充分に退けることができる」	オ・ヂヌ	9	7	
4	반제투쟁의 기치를 높이 드시오	현철	4	反帝闘争の旗を高く掲げて	ヒョン・チョル	13	5	
5	《어려울 때일수록 대담하게 앞으로 진격해야 하오》	오백룡	5	困難な時ほど大胆に前へ進撃しなければならない	오・벤리온	13	5	
6	몸소 사선을 헤치시오	한익수	6	自ら死線を突破して	한・익스	13	5	
7	광범한 군중을 혁명의 편에 든튼히 묶어세우기 위하여	리영호	7	広範な大衆を革命の側にしっかりと結束させるために	리・ヨン호	12	4	
8	항일유격대의 지휘성원들은 언제나 이신작적의 혁명적기풍을 발휘하였다	김동규	8	抗日遊撃隊の指揮員たちはいつも以身作則の革命的気風を發揮した	김・돈규	9	7	
9	사령관동지의 육친적인 보살피심속에서	강위룡	9	司令官同志の肉親的な配慮の中で	칸・위리온	13	5	
10	《강한 의지만 가지면 어떤 난관도 뚫고나갈수 있소》	남동수	10	「強い意志さえあれば、どんな難関も突破できる」	[南東洙]			
11	사령관동지의 명령이라면 어떤 난관과 시련도 이겨내며 끝까지 관철하기에 힘썼다(김주원동지를 회상하여)	강위룡	11	司令官同志の命令ならばどんな難関と試練にも打ち勝って最後まで貫徹することに努めた(김・チュヒョン同志を回想して)	칸・위리온	2	7	
12	그이께서 주신 혁명임무를 수행하여	지병학	12	司令官同志が与えた革命の任務を遂行して	치・비온하ク	9	6	
13	사령관동지의 위대한 혁명사상에 고무되어	공정수	13	司令官同志の偉大な革命思想に鼓舞されて	콘・지ونس	9	6	
14	인민의 생명財産을 보위하여	류응삼	14	人民の生命財産を保衛して	리유・운삼	12	4	
15	모든것을 혁명위업에 바치여	류경희	15	全てを革命偉業に捧げて	리유・ギョン피	9	3	
16	혁명의 폭풍우속에서 자라며 용감하게 싸운 아동단원들	황순희	16	革命の暴風雨の中で育ち、勇敢に闘った児童団員たち	ファン・스니	4	2	
第12卷 (1969)			第12卷 (1969=初版)					
1	《사람들에 대한 문제처리에서는 더욱 심중해야 한다》	오백룡	1	「人びとにたいする問題をあつかうにあたってはいっそう慎重でなければならない」	(白龍)			
2	그이의 위대한 감화력	오백룡	2	김・일손同志의偉大な感化力	오・벤리온	13	7	

初版(朝鮮語)			鈴木武全訳					
話	題名	著者名	話	題名	著者名	カテゴリ	全集	特選集
3	《우리는 자신을 혁명화함으로써만 끝까지 혁명할 수 있습니다》	전창철	3	「我々は自身を革命化することによってのみ最後まで革命をすることができるのです」	チョン・チャン Chol	9	7	
4	조국 땅에 또다시 승리의 해를 높이 올리시어	백학립	4	祖国の地に再び勝利のかがり火を高く掲げて	백·한림ム	13	7	
5	인민에 대한 그이의 지극한 사랑	리두관	5	人民に対するキム・イルソン同志の至極の愛情	리·도우찬	13	7	
6	《당원들은 언제 어디서나 당 조직생활에 충실해야 합니다》	강위룡	6	黨員はいつでもどこでも黨組織生活に忠実でなければならぬ	칸·우리온	13	5	
7	부녀회사업에 대한 그이의 강령적교시	최성숙	7	婦女會活動に対するキム・イルソン同志の綱領的敎示	첸·ソンスク	13	5	
8	유격근거지농민들에 대한 그이의 따뜻한 배려	최봉송	8	遊撃根據地の農民たちに対するキム・イルソン同志の温かい配慮	첸·ボン송	13	5	
9	사령관동지께서는 우리를 혁명전사로 키워주시었다	손종준	9	司令官同志は我々を革命戰士に育ててくださった	ソン·ジョンヂュン	13	5	
10	혁명의 사령부를 목숨으로 지켜 (최준국동지를 회상하여)	김병식	10	革命の司令部を命をかけて守り(첸·츄ングク同志を回想して)	김·비ョン싱	2	7	
11	가장 고귀한 정치적생명을 위하여	박영순	11	最も高貴な政治的生命のために	박·요ンス	2	1	
12	그는 사령관동지의 명령을 어떤 역경속에서도 어김없이 집행하였다	전문섭	12	彼は司令官同志の命令をどんな逆境の中でも確実に執行した	チョン·ムンソ프	2	1	
13	조국으로 진군하는 길에서	오백룡	13	祖国へ進軍する道で	오·벤리온	9	7	
14	사령관동지의 전략적방침을 높이 받들고	김익현	14	司令官同志の戰略的方針を高く掲げて	김·이키ョン	9	7	
15	팔도구광산로동자들속에서의 정치사업	박영순	15	パルトダ鉦山の労働者たちの中での政治活動	박·요ンス	12	7	

(備考) 左欄は『参加記』原典初版の目次、右欄は鈴木武全訳の目次である。右欄の「題名」「著者名」のうち〔 〕で括弧であるものは、鈴木は翻訳しなかった回想記のうち、『朝鮮人民の自由と解放』(未来社、1971年)に収録されているものを指す。「カテゴリ」は鈴木による13分類を数字化したもの(下記)である。「全集」は鈴木が編集した全7巻の巻次である。「特選集」は本書に収録された全28話の章番号である。

(カテゴリ) 1.銃を取るまで; 2.革命の同志を回想して; 3.不屈の女闘士たち; 4.革命のつばみたち; 5.必勝の信念; 6.革命的信義で結ばれた同志たち; 7.敵の凶計を粉碎し; 8.革命の規律; 9.不敗の隊伍; 10.抗日統一戦線のために; 11.敵を瓦解させて; 12.人民の海の中で; 13.キム・イルソン同志に従って

付表3 人名一覧

カタカナ	ハングル	漢字	言及箇所	備考
ウ・イチン	우이친		10	
ウァン・ブゲァン	왕푸관		10	
ウァンおじいざん	왕 령감		24	
ウァントンム	왕동무		20	21とおそらく別人
ウァントンム	왕동무 (왕정대)		21	改訂版では () の表記
ウィトンム	위동무		3	
オ・ウンリョン	오응룡	吳応龍	1,11	
オ・ガイ	오가이		18	
オ・ヂヌ	오진우	吳振宇	5	
オ・ヂュノク	오준옥	吳俊玉	19	
オ・ヨンヂェン	오영장		7	
カン・サンホ	강상호	姜尚昊	26	
カン・ナムソン	강남송		8	
キム・インムク	김인목		6	
キム・グァンサン	김광산		1	
キム・スクチャ	김숙자		24	
キム・ソグォン	김석원	金錫源	14	
キム・チェク	김책	金策	20	
キム・ヂャリン	김자린	金慈麟	7	
キム・チュナ	김춘하		15	
キム・チュンリョル	김충렬		4,17	
キム・チョルホ	김철호	金喆鎬	27	
キム・ジョンヒョプ	김종협		11	
キム・ゼン	김진	金振	5	
キム・テンマン	김택만	金沢万	13	
キム・ドンギョ	김동규	金東奎	18	
キム・ヒョクチョル	김혁철	金赫哲	18	
キム・ビョンシク	김병식	金炳植	2,24	

カタカナ	ハングル	漢字	言及箇所	備考
キム・マンス	김만수		19	
キム・ミョンファ	김명화	金明花	12	
キム・ヤンチュン	김양춘	金陽春	9	
キム・リョンヨン	김룡연	金龍淵	21	
キムトンム	김동무		14	
〈鉱山〉 トンム	《광산》 동무		7	
クァンヂェトンム	광재동무		24	
チ・ギョンス	지경수	池京洙	19	
チェ・チュングク	최춘국	崔春国	2	
チェ・ドウソク	최두석		5	
チェ・ヒョン	최현	崔賢	7	
チェ・ミンチョル	최민철	崔敏哲	1,26	
チェ・ヨンゴン	최용건	崔庸健	1,10,25,26	
チェトンム	최동무		9	
チャン・ウォルリン	장월린		20	
チャン・サンリョン	장상룡	張相龍	20	
チャン・ボク	장복		21	
チャントンム	장동무		9	
チュ・ソンヂュン	주선준		20	
チョ・ジョンチョル	조정철	趙政哲	16	
チョン・スニ	전순희	全順姬	11	
パク・ウソプ	박우섭	朴宇燮	26	
パク・キョンオク	박경옥	朴景玉	25	
パク・クンチル	박근철		23	
パク・ソンウ	박성우		19	
パク・ソンチョル	박성철	朴成哲	6,23	
パク・トウギョン	박두경	朴斗京	22	
パク・ヨンスン	박영순	朴永純	8	
バクトンム	박동무		17	

カタカナ	ハングル	漢字	言及箇所	備考
ハン・チャンドク	한창덕		26	
ハン・チョンチュ	한친추	韓千秋	18	
ハン・ジョンファン	한종환		11	
ハントム	한동무		20	
ピトム	비동무 (비로까테)		12	() の名は初版による
ピョンソントム	병선동무		22	
ファン・スニ	황순희	黃順姬	14	
ペク・ハンリム	백학림	白鶴林	28	
ホ主任	허 주임		9	
ホ・ソンスク	허성숙	許成淑	14	
ボンナミ	복남이		27	
マ・デヌ	마진우		6	
ヤン・イチョン	양이천		13	
ヤン・タルリョン	양달룡		20	
ユン・テホン	윤태홍	尹泰洪	3,13	
リ・スンヂョル	리순철	李順節	13	
リ・ジョンイン	리정인	李貞仁	16	
リ・ドサン	리도산 (리도선)	(李道善)	16	リ・ドソンか
リ・ドンハク	리동학	李東学	6	
リ・トンファトム	리동화	李東華	13	
リ・ヨンスク	리영숙	李英淑	10,15	
リトム	리동무		17	
リム・チュンチュ	림춘추	林春秋	6	
リュ・ウンサム	류응삼	柳応三	26	
リュ・チス	류치수		4	

(備考) 漢字表記は金日成回顧録『世紀とともに』第1～8巻の日本語訳(未来社)などにもとづく。言及箇所は、その人物の名が登場する「特選集」の章番号を示す。そのうちの太字は、その章の筆者であることを示している。

付表4 地名一覧

カタカナ	ハングル	漢字	言及箇所	備考
アムノク江	암녹강	鴨綠江	14	
アンド県	안도현	安図県	5,7,14,28	
ウァンウダ	왕우구	王隅溝	16,27	
ウァンスピョン	왕수평		10	
ウァンバボヂュ	왕바버즈		8	
ウィラング	의란구	依蘭溝	16	
ウスリー江	우슬리강	(烏蘇里江)	4	
ウンギ	웅기	雄基	18	
オベ	오배		19	
オロホチョン	얼허호춘		7	
カンサムボン	간삼봉	間三峰	14	
クムチャン	금창	金廠	16	
サトグ	사도구	四道溝	1	
サムチャヂャ嶺	삼차자령	三岔子嶺	13	
サムド	삼도		3	
サムドグ	3도구	三道溝	22	
サムドマン	삼도만	三道灣	14	
サンドマン	싼도만		6	
シンヂョン山	신정산		25	
シンホンドン	신흥동		17	
スバサンヂュ	쓰빠산즈		10,15	
スバサンディ	쓰빠상디		1	
スピンドュイヂュ	쓰평위즈	四平咀子	26	
ソガン高原	서강고원	西崗高原	14	
ソサハ	소사하	小沙河	5	
ソソサン	소서산	小西山	26	
ソタンハ	소탕하	小湯河	6	
ソヂェハ	소제하		11,26	
ソテサン	소태산		17	
ソナホ	소나허		11,17	
ソナマ	소남하	小南河	15	
ソレ	소래	笑來	5	
ソングァン	송강	松江	20	
ソングァンハ	송강하 (송장허)	松江河	3	() の表記は初版
ソンファ江	송화강	松花江	20,24	

カタカナ	ハングル	漢字	言及箇所	備考
タガシ木材所	다가시목재소		16	
タグミョ	다그묘		20	
タハラヂュ	다할라즈		15	
タバanchョン	다반촌		11	
チャビゴウ	차피거우	夾皮溝	27	
チャンベク	장백	長白県	7,16	
チャンラクトン	장락동		27	
チュソンジョンヂャ	추송정자		9	
チョチャンヂュ	처창즈	車廠子	8,16,19,28	
チョヨン	조연		20	
テサハ	대사하	大沙河	5,7,14	
テチャンガン	대장강	大醬江	5,14	
テジョンヂャ	대천자	大甸子	7	
テファリヤング	대화양구(대화철구)		19	() の表記は初版
テヨプチャ	대엽자	大叶子	15	
トゥマン江	두만강	豆満江	16,18	
トサンヂュ	토산즈	土山子	15	
トムホ	도부허		4	
トンチョン	동촌		11	
トンナムチャ	동남자	東南岔	8	
トンニョン県	동녕현	東寧県	19	
トンファ	둔화	敦化県	7,12	
トンヤントウン	동양툰		14	
ナムベヂャ	남배자	南排子	6	
ナモドウ	남호두	南湖頭	7	
二十五ドグ	25도구		16	
二トグ	2도구	二道溝	19	
ニョンアン県	녕안현	寧安県	5,19,21,22	
ノフ里昂	노흥명		5	
ノベコウ	노배커우		10	
ハムギョンブクト	함경북도	咸境北道	16,18	
ハムフン	함흥	咸興	14	
ハリンゴル	할빈골	ハルハ河(Халх гол)	14	
パルトグ鉱山	팔도구광산	八道溝鉱山	7	
ハンチョング	한송구	寒葱溝	8,14	
ピグク山	피극산		25	

カタカナ	ハングル	漢字	言及箇所	備考
ファジョン県	화전현	樺甸県	6,7,24	
ファニン	환인	桓仁	13	
ブアムドン	부암동	富岩洞	16	
ファリョン	화룡	和竜県	28	
ブグム	부금	富錦	15	
ブルゲンラヂャ山	붉은라자산		16	
ブルホ	푸르허	富爾河	7	
ペクトウ	백두	白頭	28	
ヘルランホ	헬랑허		21	
ホソンミョン	호성명		1	
ポチョン	보청	宝清県	15,17,26	
ボマヂョンヂャ	보마정자	宝馬頂子	15,25	
ホリム	호림	虎林県	4,9,15,25,26	
ホンアムドン	홍암동	紅岩洞	16	
ホンソクラヂャ	홍석라자	紅石砬子	2,24	
ボンリムドン	봉림동	鳳林洞	12	
ミホンヂン	미혼진	迷魂陣	7,8	
ミョンウォルグ	명월구	明月溝	5,14,27	
ムウォン県	무원현	婺源県	1,26	
ムサン	무산	茂山郡	16	
ムソン	무송	撫松県	3,7	
モンガン県	몽강현	濛江県	6,13,23	
モンルン県	몽릉현	穆陵県	19	
ヨハ県	요하현	饒河県	1,4,10,11,17,25,26	
ヨンギル県	연길현	延吉県	7,12,16,27,28	
ラジン	라진	羅津	18	
ラナム	라남	羅南	14	
リムガン	림강	臨江	13	
リャンガンダ	량강구 (량장거우)	兩江口	3	() 内の表記は初版
リュスチョン	류수촌	柳樹村	7	
リュスハヂャ	류수하자	柳樹河子	6	
ロルリ河	롤리하		26	
ワンチョン	왕청	汪清県	5,19	

(備考) 漢字表記は判明したもののだけを記す。言及箇所は、その地名が登場する「特選集」の章番号を示す。